

研究

龍溪 矢野文雄先生 函

佐伯史談会

賛助会員 山内 武 麒

経国美談を書く(承前)

はじめは一つの新たな「立憲帝國」を描いてみようと思つたが、一切を想像による架空のものにする、或はその筋から発行禁止を食わないとも限らぬから、なるべく史実を中心にしてその一部を脚色するのが安全だと考へた。しかしフランス革命をそのまま取り上げたのではまだ新しく生々しい事実にあり、事件の内容もよく知られてゐるから、これを都合よく粉飾することは中々むづかしい。ところがギリシヤを素材にとれば、古代のことであるから飾りやすく、殊にセーベの興亡史は中々面白い。事は二千四昔の一小共和国に關することであるから十分に粉飾する余地があり、南史人特有の燃ゆるような熱情を駆つて、民権の伸張に慘憺たる苦心を重ねるさまを描くのに恰好な舞台である。

そこで先生は病が癒えると、多忙の間に寸暇を以て構想を立て、痰氣中に集めた多くのギリシヤ史を中心として、一篇の歴史小説をまとめた。参考にしたギリシヤ史とは、

Geage Grate のギリシヤ史 十二冊

John Gillies のギリシヤ史 八冊
 Counap Jhirwalli のギリシヤ史 八冊
 Geage W. Cox のギリシヤ及びローマの古代史 一冊
 William Smith のギリシヤ史 一冊
 であつた。

さて實際に書くとなると、古腋の疾患のため自分で書くことが出来なかつたので、当時「報知」の記者であつた佐藤蔵太郎に口述して筆記させ、あとで先生が筆を入れた。佐藤蔵太郎は先生と同郷で佐伯出身の人であり、当時菊亭香水と号し、「慘風悲雨世路日記」などの小説を書いて売り出していた文人でもあつた。

このようにして明治十六年(一八八三年)三月、先生三十三才の時「経国美談」の前篇が出る。全国に非常な一大センセーションを巻き起こした。当時、むしろ將來に希望を抱く青年で「経国美談」を読まぬ者はほとんどないといわれたが、全国の青年たちに如何に大きな感動を与えたかは、幾十載といふその頃として未曾有の版数を重ねたことでも推して知ることが出来る。この書物を讀んで或る者は民権運動に身を投じ、或る者は政界に志を立てた。少なくとも一般大衆に政治とは何かという自覚を与え、政黨熱をふふる原動力となつた。この本の中に於けるペロピダスの従者レオンの歌つた「春の歌」は広く青年たちに愛誦されてゐた。その歌は、

「見渡せば 野ノ末 山ノ端 マネ元 花ナギ望ゾナウ
 リケル 今ヲ盛リニ咲キ揃フ 色香愛タキ其花ニ
 過ぎ越シ方ヲ尋ヌレバ 憂キコトノミゾ多カリキ
 霜降ル朝ニハ葉ヲ留シ 雪降ル夜ニハ枝ヲ折リ 枯
 レントマデニ馳メラレ 集ハ会フ憂キコトノ 積リ
 積リシ其中ヲ 研ヘ忍ビシ甲斐アリテ 長閑キ春ニ
 巡リ逢ヒ 斯ク咲キ出ルゾ愛タラレ 世ノ為ニトテ

誓ヒテシ、其ノ身ノ上ニ暮ノ花、は蒼ハ憂キ事ト
知リオバ何ケ憾ムベキ 春ノ花コソ例ナレ 春ノ花
コソ愛タケレ

といふのである。この歌の意は、心がて来るべき立憲政
体の春を迎えるため、霜雪の艱苦を悉ぶべきことを風刺
し、民権運動家に勇気を吹込んだものである。

先生はさらに、六七年たつたから後篇を書きつものに
していたが、十六年の八月にまた病氣にかがったので、
予定を変更して病後の休養期間に後篇を書いた。この年
の八月から九月にかけて、

「微恙ノ故ヲ以テ、親ラ社務ヲ執ラズ。家居シテ病ヲ
養ヒ、時ニ論説ヲ草シテ、之ヲ社友ニ寄スルノミ。十
月ニ至リ箕浦、大養ノ二兄ハ尚遊テ北越東羽ニ在リト
雖モ、藤田兄ハ病稍ヤ癒テ社務ヲ監シ、尾崎兄ハ地租
改正ノ議ニ関シ、大篇ヲ結撰スルノ挙アリ。余ノ心身
少ク闊ナルヲ得。乃チ二兄ニ請テニヶ月ノ間ヲ假リ、
遂ニ述作ニ従事スルニ至ル。」

と、後篇ノ自序に叙している。今度は速記者若林珣蔵の
力を借り、先生はその筆記に筆を入れた。

前篇は英雄たちの智略が成功してスバルタの羈絆を脱
し、霸業成つたセーベの英雄豪傑を描いたのに対し、後
篇は無秩序な暴民の乱により英雄が災害に会うことを描
き、さらに進んでセーベの国内統一から属邦との同盟、
また國威の海外伸張を述べ、世界列國の連盟から地上の
大平和時代の招来を描いてある。龍溪先生の「世界大平
和」の理想は、すでにこの時からその芽を発していたの
である。

後篇の最後は

「セーベノ諸名士ガ、十九年間ニ於テ、内ハ好党ヲ除
キ、外ハ國勢ヲ伸張セル、経國ノ美談ヲ記シ来テ、筆

ヲ此ノ最盛ノ年ニ止ム。讀者諸名士ガ、新國ヲ興セル
大業ノ秩序ト 其ノ寛猛、中ヲ得タルノ拳勳トヲ記
憶セヨ

と結んである。若し先生が政界に志を得ていたならば、
内は立憲制を一日も早く確立し、國力の充実を図るとと
もに、外に向つては世界列國の連盟と世界大平和を提唱
したてあるうことは、この「経國美談」の全篇にみなが
るその気魄から推察することができぬ。

後篇は十七年（一八八四年）二月、先生三十四才の時刊
行したが、これもよく売れた。「経國美談」は今でいう
ベストセラーになつたのである。徳富蘆花は「其れから
経國美談の巻で、僕等は歎息徹夜してイバミンダス、
ペロピダスとセーベカ経國に眼を悪くしたかも知れぬ。」
と「思出の記」に書いてあるように愛読されていた。

「経國美談」の意外な売行きによつて、先生の懐中思
いもかけない印税が入つてきたので、かねてから考えて
いた洋行を実現することにした。印税は不十分ながらも
一二年の洋行費に充てられるだけに上つたといふから、
驚くべき売行きであり、売文銭をもつて海外に遊学した
の龍溪先生が第一号であつたといわれている。

ここで「経國美談」の文学的意義について概説するこ
とにしよう。

「経國美談」は前述の通り材をギリシヤ古代史にとり、
セーベがスバルタの羈絆を脱して独立し、さらに列國と
の合従連衡の策に成功して、ギリシア全土の盟主となる
までの十九年間において、イバミンダス、ペロピダ
スなどの諸英雄が、国内におつては好党を除いて民主政
治を打ち立て、外におつては同盟を作り、さらに國威を
遠くペルシアまで伸張した。その経國の美談を叙述した
ものである。

題材からいふと歴史に属すべきものであるが、著者龍溪先生の作意は、政治史上の人物や事件を敷衍しなが
ら、この時代の政治的興味に訴えようとしたものである。

その前篇の自序に、
「史家がセーベノ事ヲ記スルヤ、多クハ其ノ大体ニ止
メテ、当事ノ顛末ヲ詳記スル者少ク、人ヲシテ模糊雲
烟ヲ隔ツルノ想ヒアラシム。是ニ於テカ始メテ其ノ欠
漏ヲ補述シ、戯レニ小説体ヲ學バント欲スルノ念ヲ生
ジタリ。然レドモ予ノ意、本ト正史ヲ記スルニ在ルガ
故ニ、尋常小説ノ如ク、擅ニ実事ヲ變更シ、正邪善惡
ヲ顛倒スルガ如キコトヲ為サズ。唯実事中ニ於テ、少
シク潤色ヲ施スノミ。」
とあり、また凡例には

「著者が此書ヲ編ムヤ、本ト正史中ノ実事ノミヲ纂記
スルノ心組ナリシニ、書中ノ事柄ハ、遠キ古代ノ事ニ
シテ、諸書ヲ搜索スルモ斷続シテ詳ナシガ所アリ。
因テ之ヲ補述シ、人情滑稽ヲ加テ小説体ト為スニ至レ
リ。然レドモ本ト正史実事ヲ專ラ記載スルノ本意ナル
ガ故ニ、慶七正史ノ実事ニ傍ラザルヲ勉メタリ。」
とある。

題材が古代ギリシヤのことで模糊として正体を把握し
がたい。それで作者の想像力を加える余地が多いので小
説体にまとめたといふのである。著者龍溪先生は、
すがにギリシヤ古代史に精通し、一々その出典をあげて
正史に忠実なることに努力しているから、読む人に小説
と読む愉快さと、正史と読む機能を同時に持つことがで
きる。

龍溪先生の意図は、前述べたように「大日本史」「日
本外史」「太平記」などが王政復古の機運をひき起す原
動力になつたことにならつて、民権伸張の憲政樹立を鼓

吹するたためは、歴史も伝記でもなく、「太平記」のよう
な小説にして、一般大衆を興味で引きずつていくことを
ねらつたわけである。この意味では先生の「経国美談」
は成功した。飛ぶようによく売れて、その内容が憲法発
布、国会開設に直結するので、先生の意図は実現された
といつてよいであらう。

なお、ここに注目すべきは、この「経国美談」を通し
て見られる龍溪先生の小説観と文体観である。先生は、
小説を世道人心のためとか、勸善懲惡のためとかにする
従来の功利主義的立場から離れて、一種の独立した文学
的所産として観ようとした。このような文学独立論を学
説として提唱したのは、明治十八年（一八八五年）に出版
された坪内逍遙著の「小説神髓」であるが、それより以
前に龍溪先生がこれを主張したことは注目し値すること
である。

また、明治の初めからわが國の文章は、漢文の剛を取
らず、和文の柔も知らず、放縱不法をきわめていた。有
識者たちも漢文をまつて律する力なく、和文をまつてこ
れを抑える力もなかつた。およそ文章は時代の推移にし
たがつて変つていくものであるが、先生はそれを承知し
ていて、新しい文体を創始しようとする意気込みでこの
「経国美談」を書いてゐる。凡例に、

「今や我邦ノ文体ニ一定ノ体裁ナキガ故ニ、著者ハ此
書ヲ草スルニ当テ、随意自由ニ諸種ノ文体ヲ用イタリ」
とあり、また

「此書ノ文体ハ雜氏ノ文体ニモアラズ。著者休ノ文章
ト評セラルルモノナリ。」
とある。

先生は文体として、漢文体、和文体、政文直訳体、俗

諸僱言体の四体を認めようとした。これにはそれそれの特徴として典雅悲壯、優柔温和、緻密精緻、滑稽曲新があげられる。先生はこの四者を併用して各々の特徴を打ち出そうとしたのである。この考え方はこれより後に刊行された「日本文体文字新論」の基礎となつてゐる。

要するに、「経国美談」はギリシヤ古代史に基づく歴史小説といつても単なる翻訳ではなく、さりとて純然たる創作でもない。強いていへばこの兩者の中間に立つものといふべきものである。また、この明治初期に於ける政治思想をそのまま盛ろうとしたものでもない。しかし龍溪先生が説いた自由民権の思想は、時代の人々の憧れであり、さらに憲法發布、国会開設を目標とし、その実現に奮闘して来た当時の青年たちは、この「経国美談」に出てくる英雄たちが、スパルタの圧迫を脱して民主政治をうち立てたその意気に共鳴し、その活躍を礼讃したのには当然である。この意味で、「経国美談」はこの時代に於ける政治的興味をいかに上にもあふり、深い感化を与えたものであつた。

さらにまた、この「経国美談」が明治時代の文学界に与えた影響も無視できない。従来戯作視されていた小説が、政治と握手して当時の青年政客の喝采をあび、深い感銘を与えてわれもわれもと奪うようにして読んだのであるから、世の中の小説観が變つてきて、文学史上空前な政治小説ブームを招いて、多くの政治小説があらわれた。重なるものをあげると、東海散士柴四郎の「佳人之奇遇」、末広鉄腸の「雪中梅」などがある。また一般に海外の知識が深く、新しい歴史小説も生れず、このようない政治小説の工夫も未だしの時代であつたから、この「経国美談」のもつ意義は頗る大きく、明治小説史上不朽の地位を保つものといつても決して過言ではあるまい。

また序に「演説文章組立法」と「日本文体文字新論」にふれておく。

「演説文章組立法」は明治十七年五月に刊行された小冊子で、先生が外遊への出発に當つて丸善から発行された。この本はその序文によると「明治九年阿波徳島、英学校ニ在ルニ当リ試ニ起草シテ生徒ニ示シタルモノ」を基礎として改訂し、「古今論議の組立」と論ずるの主旨であつたという。即ち文章組立法とは論理学の意味ではなく、古今の論説を分類して、上昇法、下降法、単一法、比較法、前置法、後置法、分割法、交錯法、正例法、省略法の「原形十論法」とあげて研究する一種の文章研究であつた。福沢諭吉が演説文章に秀でていたことは改めて説くまでもないが、龍溪先生もその衣鉢をひいて、一種の帰納的な文章研究を行ったことに留意すべきである。

「日本文体文字新論」は、先生が外遊してロンドン滞在中、渡英して来た弟武雄に口述筆記させて、報知新聞社から明治十九年三月二十二日に発行した本である。

この「日本文体文字新論」は、その序文に、「近來日本ヨリ來者ヌル新聞杯ヲ見レバ、我が國人ハ今方ニ文字文体ニ注意スルノ時ナルガ如シ。凡ソ世事ハ機会ニ投スルコト大切ナレバ、文字文体ニ關スル余ノ卑見モ、今日ニ於テ之ヲ書送シナバ、緩分ウ我國人ノ參考ノ助ケトモ為ルベシ。」

とあるように、海外旅行によつて得た見聞にもとづいて所信を論じたものである。これは当時國語國字の問題がローマ字論と假名文字論とやかましくなつていたことに對する警告であつた。本問久雄はこの本を「明治國語学史の重要な一つの記念」といつてゐる。

前述べたように、先生は「経国美談」の序文や凡例に

書かれていたように、文章及び文字について深く考えるところがあった。殊に後篇序文には長文の「文体論」を付けてある。「余嘗て維新以来ノ文体ヲ觀察シ、聊カ心ニ会スル所アリ」として、文体が乱れていることも、複雑精密になつていく社会に適合するところから生れたので、一種の新体が必要になつたことを示したのだとした。現在の文体に漢文体、和文体、改直訳体、俗語俚言体の四体があるとし、その得失を論じて「経国美談」ではこの四体を併用した。この考えが「文章組立法」を経て、この「日本文体文字新論」が生れたのである。

龍溪先生はこの「日本文体文字新論」に於ては、「之ヲ学ブニ易クシ、之ヲ見ルニ便ニ、又之ヲ書クニモ、之ヲ見ルニ易クシ、之ヲ見ルニ便ニ、最モ日本ニ実益アル文字ナリト認ム」

という主旨から、ローマ字論の急教にも、假名文字論にも反対し、むしろ漢字を保存し、従来の和漢混用文を平易に通俗にし、漢字には振假名をつけた所謂「西文体」を主張した。その具体案として、ハナ字あるという漢字を三十乃至五十百字に制限することを主張し、後年「三千字引」を試作している。この主張は、ほぼ今日の実情に近いもので、四五十年前からこのことを主張したとは、さすが龍溪先生で、その先見の明に驚んだ卓見と言わねるを得ない。

さざんか

つい先日朝西谷を通つたら、路上にさざんかの紅い花が散らばって、仰ぐ見上げると、塀の上でさざんかの花が咲いて、さざんかの花は、もう盛りをすぎている。

この屋敷はもと家中の住居、士族屋敷であるが、気がついて見ると、山際通りにもおちこち咲いて満開である。

城下新佐伯の秋も、いよ／＼深くなつた。

(H)

随筆

ぶんごきいき

—わたしの城下町—

東京部

賛助会員 石

田 靖

一

たちばなには象徴される日笠線に乗って大分を過ぎると、山の斜面や丘の上に蜜柑がたわわにみわたっている。先も風もさすがにはさわやかである。

いくつかのトンネルをくぐり、輝く海がまたが佐伯である。

街の背後に城山があつて、緑の木々がうっそうと繁り、前に番五川が流れている。

毛利氏二万石の城下新佐伯である。

旧佐伯藩は、豊後七藩のうち二万石の小藩であつたが、先代高範子爵は、優れた閣僚に恵まれていた。悲劇の宰相近衛文麿公爵千代子夫人、筑波侯夫人、黒田男夫人、音楽家近衛秀麿夫人など、いづれも佐伯の毛利家から出ている。

わたしの父豊城は、佐伯小学校の校長をしていて、傍ら毛利家の家塾教師として毛利邸に出入していた。

わたしの祖父徳平は若い頃、村から出て佐伯藩に仕えていた。階級は、小祿のお徒士であつた。当時は、士農工商の順位があつて、たとえ馬には乗れなかつたが、廿ムライであつたから、村一番の出世頭であつた。